

『増廣註釋音辯唐柳先生集』43巻12行本考 —12行本の特徴および13行本との関係

戸崎哲彦

はじめに

今日、『増廣註釋音辯唐柳先生集』の通行本は、正集43巻と別集（『非國語』）2巻・『外集』2巻・『附録』1巻より成る、毎半葉13行・行23字本である。以下、音辯本と略称し、43巻13行本と呼ぶ。四部叢刊本や四庫全書底本がそうであり、国内外の図書館・研究所等に蔵するのもこれが圧倒的に多い。明・嘉靖間（1522-1566）郭雲鵬濟美堂が覆刻した宋・世綵堂本『河東先生集』の「集傳」末に「右文九編、皆四十三卷本後所載者、茲刊四十五卷本後、舊雖無此文、余互參閱、弗忍舍置、迺録附之」として区別する「四十三卷本後所載者」は音辯本「附録」に一致する。当時すでに音辯本といえは43巻13行本を指していたことが知られる。しかし前稿で紹介したように¹、これとは行款を異にする12行21字本があり、しかも正集45巻12行本の刊本1部とその鈔本1部、その他に正集43巻12行本が少なくとも4部、現存することが判明した。43巻12行本は巻数では43巻13行本に属すが、行数では45巻12行本と同じ、つまり中間に位置するといえる。本稿では、マイクロフィルムではあるが、この計6部の実見調査に基づいて、45巻本や13行本との比較を通して43巻12行本の相異と特徴を究明し、さらに三者の先後関係に迫りたい。以下、12行本の収蔵先と本稿での略称を示す。

1) 【李本】 北京大学図書館蔵李木齋旧蔵の刊本、正集45巻12行本²。鈔本は蓬左文庫所蔵、金沢文庫旧蔵。ともに淳祐九年（1249）作の劉欽「後序」をもつ。

¹「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻12行本考」（『島大言語文化』33、2012年）、「清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考—天祿琳琅蔵本・四庫全書本・清学部図書館蔵本とその行方」（『島大言語文化』35、2013年）、「日本舊校鈔《増廣註釋音辯唐柳先生集》四十五巻本及南宋刻《音註唐柳先生集》略攷」（中華書局『文史』2014-1）、「清代民国私家蔵『増廣註釋音辯唐柳先生集』考—43巻13行本“宋刊”說と43巻12行本“元刊”說の検討」（『島大言語文化』36、2014年）。

²『第三批國家珍貴古籍名録圖録（2）』（國家圖書館出版社2012年）#07210（p74）に書影（巻1葉1a）あり。

以下の4部はいずれも12行本ではあるが、正集を異にする43巻本である。

2) 【御本】『天祿琳琅書目後編』巻1「宋版首部」に著録する『御題増廣註釋音辯唐柳先生集』、前稿にいうA³。台湾・故宮博物院蔵#13833と北京図書館蔵#10712（『別集』）との二箇所に分散して現存。故宮の書目では宋刻説を踏襲し、北京図書館等の書目では元刻として鑑定が分かれる。

3) 【袁本】袁克文旧蔵本である北京図書館所蔵#8711。袁克文・張元済は宋刻、傅增湘は元刻として鑑定が分かれる。後に『北京圖書館古籍善本書目』⁴や『中國古籍善本書目』⁵・『(稿本) 中國古籍善本書目』⁶・『中國古籍善本總目』⁷・『第四批國家珍貴古籍名錄圖録(1)』⁸は元刻とし、『總目』等は吉林市図書館蔵本をこれと同版とする。吉林本は未見であるが⁹、諸書目等の記録が整合しない⁹。

4) 【凌本】『天祿琳琅書目後編』巻6「宋版集部」に著録する音辯本3部中の一つ、前稿にいうBであり¹⁰、後に凌志斌の収蔵となって北京図書館に帰した#4977。北図等の書目では元刻とする。ただし存「四十三卷、外集二卷、附録一卷」、つまり「別集」二卷・「年譜」一卷が欠落しており、さらに『北京圖書館古籍善本書目』¹¹に「目録、卷三至四、三十二至三十八配明初抄本」、後に『中國古籍善本書目』¹²・『(稿本) 中國古籍善本書目』¹³・『中國古籍善本總目』¹⁴では「目録……至三十八配明初刻本」。いずれにしても内十巻は後の補配である。

5) 【海本】上海図書館所蔵の「宋刻本」#線善785755。書目では43巻本とし、かつ『中國古籍善本書目』・『(稿本) 中國古籍善本書目』・『中國古籍善本總目』では北京図書館#4977=凌本と同版(#970)とする。本書は「存四巻」、

³ 清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」p3、p11-12。

⁴ 『北京圖書館古籍善本書目(集部)』(北京図書館編、書目文獻出版社1987年、p2062) #8711。

⁵ 『中國古籍善本書目(集部)』(上海古籍出版社1989年、p128) #1492。

⁶ 『(稿本) 中國古籍善本書目(下・集部)』(天津図書館編、齊魯書社2003年、p1206上) #969。

⁷ 『中國古籍善本總目(集部上)』(翁連溪編校、線裝書局2005年、p1206上) #969。

⁸ 國家図書館出版社2014年。#09982(p176)に書影(巻1葉1a)あり。

⁹ 詳しくは拙稿「清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」p18-19、「清代民国私家蔵『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」p154-155。

¹⁰ 清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」p5、p13-15。

¹¹ 『北京圖書館古籍善本書目(集部)』(p2062) #4977。

¹² 『中國古籍善本書目(集部)』(p128) #1493。

¹³ 『(稿本) 中國古籍善本書目(下・集部)』(p1206上) #970。

¹⁴ 『中國古籍善本總目(集部上)』(p1206上) #970。

しかも巻10～13のみ、つまり巻首や43巻以後を欠く残本であるから、12行本であることは知られても、45巻本か43巻本か、さらに凌本と同版かの判定には別の根拠が必要である。

I 43巻12行本の特徴

まず、現存する12行本の特徴について、実見に基づき、主に版式・編次等の編成形式上から異同の有無とその内容を概観しておく。45巻12行本の李本とその鈔本の特徴については、その存在自体がほとんど知られていなかったために、前稿で詳しく紹介した¹⁵。43巻12行本についても広くは知られていないが、管見によれば、先行研究の中で最も書誌学的紹介が充実しているのが故宮博物院所蔵の御本であり、『國立故宮博物院宋本圖録』¹⁶の「増廣註釋音辯唐柳先生集四十三卷別集二卷附録一卷」の解題が、巻1葉1aの書影も掲載して恐らく最も詳しく、またその文は後人にも襲用されている。それに次のようにいう。

唐柳宗元撰。宋童宗說注釋……南宋建陽書坊刊小字本。版框高十八・五公分，寬十二・五分。每半葉十二行，行二十一字，小註夾行，行亦二十一行。四周雙欄，間亦作左右雙欄。版心小黑口，雙尾魚。中縫上方偶記大小數，魚尾間上載柳文幾（或卯文幾、木文幾、柳幾、文幾、卯文幾、夕幾、木幾、柳另幾、外附、外錄集），下署葉次。宋諱玄、朗……慎、敦諸字偶缺末筆，蓋避宋諱不甚謹嚴。書首冠乾隆四十八年御筆題文，次乾道三年十二月吳郡陸之淵「柳文音義序」，次「増廣註釋音辯唐柳先生集諸賢姓氏」，次「柳先生年譜」，次附「目錄」。全書釐為『正集』四十三卷、『別集』二卷、『外集』二卷、『附録』一卷。此本除『外集』已佚之外，卷四十三第十九葉反面「龜背戲」詩後，較原目少「聞黃鸝」……「省試觀慶雲圖」、「春」諸詩，次葉為此卷之末，僅有詩文二行，其內容，即目錄此卷最後一日之「春懷故園詩文」，是葉葉碼標為第二十葉，與前葉連貫，其字體又不類後世補刻，殆原刻即缺。……是本雖出建陽書坊之手，而紙潤墨勻，筆畫晴朗，實屬鈔見，故乾隆愛之如寶，親為御題。原藏昭仁殿，為天祿琳琅舊藏，『寶禮堂宋本書錄』、『天祿琳琅續目』均有著錄。……是本宋諱遇“廓”

¹⁵「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷12行本考」（『島大言語文化』33、2012年）、「日本舊鈔《増廣註釋音辯唐柳先生集》四十五卷本及南宋刻《音註唐柳先生集》略攷」（中華書局『文史』2014-1）。

¹⁶ 國立故宮博物院編纂1977年、p148-150、図版68。

字皆不缺筆，始刊於光宗時。『寶禮堂宋本書録』載是書稱“書首陸氏「序」文後尚有潘緯「序」文”，此本則亡，蓋已佚去。緯「序」作於乾道丁亥，其年距光宗止二十餘年，以此推之，潘書成後，未久坊賈即取而合刊之。

ほぼ同じ文が任莉莉「柳宗元文集版本考」¹⁷⁾にも見える。この著録は詳細ではあるが、なお補足すべき点や訂正すべき誤りが少なくない。以下、その指摘と検討を交えながら、李本と御本等12行本との比較によって45巻本と43巻本の相違、43巻12行本の特徴を考察する。

1：乾隆帝御筆題文

御本・凌本には各冊の扉裏に乾隆帝「五福五代堂寶」・「八徵耄年之寶」・「太上皇帝之寶」の三御璽が縦に押されている。天祿琳琅取藏本の定式である¹⁸⁾。

御本にはその次に乾隆帝の御筆題文一葉（半葉5行×行9字）あり。文は王先謙刊本『天祿琳琅書目後編』にも録されている。厳密に言えば、「御題増廣註釋音辨唐柳先集」中の「注」字は「註」に作る。王氏刊本の誤であろう¹⁹⁾。「辨」は李本では巻首中では「辯」に作るが、毎巻の行首では「辨」に作ることもあって一定しない。字音・字義は早くから通じ²⁰⁾、他本にも同様の現象が見られるが、全体的にみて「辯」に作る方が多い。本稿では「辯」を用いる。

なお、乾隆帝には「御製題増廣註釋音辨唐柳宗元集」なる詩があり、四庫全書本で文淵閣本のみが巻首に掲げる。

2：劉禹錫纂「唐柳先生文集序」

李本には巻首に劉「序」を配す。一葉、12行×21字。版心中縫は無刻、葉第は一。「完」・「貞」・「敬」等の宋諱は末一画を缺筆する。

御本はこの「序」を欠く。故宮の解題では『寶禮堂宋本書録』によって潘緯「序」を亡佚とするが、劉「序」も欠き、『天祿琳琅書目後編』に「前有乾道三年陸之淵「音義序」、註家〔賢〕姓氏、「年譜」というのに一致する。劉「序」も亡佚と解すべきである。袁本・凌本もこれを有する。ただし若干異同あり。

袁本には劉「序」一葉（12×21）を「諸賢姓氏」の後に置く。版心中縫は無刻、葉第は刻するが不鮮明、「一」あるいは「七」に似る。宋諱を缺筆せず。

¹⁷⁾『故宮學術季刊』第5卷第4期（国立故宮博物院出版1988年）所収、p83、図1。

¹⁸⁾『天祿琳琅－乾隆御覽之寶』（国立故宮博物院出版2007年）。

¹⁹⁾王本としては『書目續編』（広文書局1968年影印）所収『欽定天祿琳琅書目・續目』を用いる。

²⁰⁾『廣韻』上声「彌」に「辯：別也，理也……辨：別也」。

凌本は「目録、卷三至四、三十二至三十八配明初抄〔刻〕本」というが、補配は「目録」だけでなく、劉「序」等を含む卷首全体に及ぶのではなからうか。また、卷首も版匡・版心・界線等をそなえており、かつ字様も他と酷似しているから、補配であるとしても、「抄本」のようには見えない。「刻本」が正しい。行款(12×20)を異にし、版心中縫には「柳序」、葉第は「三」に似る。缺筆せず。葉第が三であれば、その前に缺葉があり、それは陸「序」の二葉ではなかったか。上部に御璽「天祿繼鑑」・「乾隆御覽之寶」あり。

3：陸之淵撰並書「柳文音義序」

李本は柳「序」一葉の後に陸之淵「柳文音義序」二葉、8行×16字、版心中縫に「柳序」、葉第は二・三。

御本は御筆題文の次に陸「序」、上部に御璽「天祿繼鑑」・「乾隆御覽之寶」あり。収蔵時にすでに劉「序」を欠いていた証である。陸「序」は二葉(8×16)、版心中縫に「柳序」、葉第は一・二。李本と異なる。

袁本にも陸氏「序」(8×16)二葉あり。御本とは字様は固より版面の磨滅・亀裂部分も一致しているから、同版と認めてよい。ただし全体に及ぶとは限らない。

凌本はこれを欠落する。

4：潘緯撰並書「序」

李本は二葉(6行×12字)、版心に「柳文序」、葉第は四・五。「序」題はないが、直前の陸之淵「柳文音義序」が潘緯『柳文音義』のために寄せたもの。したがってこれも「柳文音義序」と称してよい。音辯本は先行の五百家註本が採っていなかった潘註を多く採用。

御本・凌本はこれを欠落する。

袁本は陸「序」の後に潘「序」二葉(6×12)、版心に「柳文序」、葉第は四・五。したがって陸「序」とは連続していない。版式は李本と同一であるが、「敢」・「盡」・「潤」・「亥」等多くの文字に筆致の相異が認められるから同版ではない。

潘「序」の存在は貴重である。音辯本のみが収めるが、音辯本にあっても通行本ではこれを欠き、陸之淵「柳文音義序」のみを掲げる。

5：劉欽撰並書「河東柳先生文集後序」

12行本・13行本かを問わず、李本のみにあり。二葉(6行×9字)、葉第は六・七、したがって劉錫錫「序」から連続する。末に「淳祐九年(1249)歳己

酉良月朔日、平山劉欽書識」。全文は旧稿に詳しい²¹。

音辯本は後に劉欽「後序」が失われて陸之淵「序」・潘緯「序」で始まり、さらに後には潘「序」も失われて陸「序」で始まることによって陸之淵輯註本のような様相を呈す。なお、劉欽のものは「後序」であるから集後に置かれていたはずであり、それが巻首に移されているから、今日知られるような形態をとる李本の成立にはこの前に一段階あったと考えねばならない。

6：「増廣註釋音辯唐柳先生集諸賢姓氏」

李本は劉欽「後序」の後に「増廣註釋音辯唐柳先生集諸賢姓氏」6行×17字、一葉、版心中縫は無刻、葉第は八。「張敦頤」の宋諱「惇」の嫌名「敦」字の末一画を缺筆する。

御本は陸「序」の後に「増廣……諸賢姓氏」（6×17）一葉。版心中縫は無刻、葉第は不鮮明、「六」あるいは「七」か。すでに李本と異なり、「敦」を缺筆せず、また「晦」・「張」等の筆致にも相異が認められる。

袁本は版面状況も御本と一致。「敦」も缺筆せず。

凌本は行款（6×16）を異にし、版心中縫は「柳序」、葉第は四。「敦」を缺筆せず。末行上方に「姓氏畢」3字あり。すでに李本や御・袁の両本とも異なる。葉第を考えれば、劉「序」葉3があるから、その前に葉1・2、恐らく陸「序」を欠落したものであり、この編次と「姓氏」の版式は他に元明間刊本にも見える。「目録、卷三至四、三十二至三十八配明初抄〔刻〕本」というが、やはり「目録」だけでなく巻首そのものが補配されていると考えられる。

前稿でも触れたように²²、この「諸賢姓氏」は後述の「目録」と共に諸版本の特徴が顕著に現れている部分である。詳しくは後文で整理するが、凌本のように「姓氏畢」を有するものは12行本にはなく13字本に見られるが、「明初抄〔刻〕本」であるか否かは検証の余地がある。この一本は比較的多く現存している。台湾故宮博物院蔵#5818（沈贈）、北京図書館蔵#10212（『天祿琳琅書目後編』C）・#3549・#0528、故宮博物院蔵#13836（楊紹和旧蔵）、日本国立国会図書館蔵本（WA35-89）などがそうであり、「諸賢姓氏」が行款6行16字、版心「柳序」、葉4b末の行頭に「姓氏畢」があるが、後述する「目録」等の版式が明らかに異なる二種に分かれる。この他、明刊本には一本には「姓氏

²¹「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷12行本考」（『島大言語文化』33、2012年）p32。

²²「私家蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」（『島大言語文化』36、2014年）。

畢」がなく、「正統戊辰善敬堂刊」の牌記を刻したものが少なくとも二種（13行本と9行本）があり、また一本には「正統戊辰善敬堂刊」の文字（陰刻）を削去してその長方形の枠（二重）を残したまま入木した墨釘のもの、さらに「正統戊辰善敬堂刊」全体を削去したもの、削去後に罫線を加えたものなど、明版は通修されてかなり複雑な様相を呈している。

7：「柳先生年譜」

李本は「目録」の後に「柳先生年譜」、12行×21字、十葉、一～十がある。蓬左文庫に蔵する金沢文庫旧蔵本は聡達（1280-?）の手書による宋刊45巻本の鈔本であり、版式は李本と同じであるが、「柳先生年譜」を「目録」の前に置く。これが本来の編次ではなかったか。版心中縫は統一せず、葉1・葉10つまり首葉と末葉は無刻、葉2は表裏に跨る一枚の家系図であって版心がなく、中央下方に「普二」白文、葉3から葉9は中縫に「木普」・「卯普」・「柳普」等。宋諱は不徹底ながら「玄」・「敬」・「貞」・「弘」等を缺筆、「廓」は缺筆せず。

御本は「増廣……姓氏」の後、「目録」の前に「年譜」（12×21）十葉、一～十がある。版心題は李本と同じで統一せず。「貞」・「弘」等を缺筆。末葉の上方に「天祿繼鑑」・「乾隆御覽之寶」あり。

袁本は劉「序」の後、「目録」の前に「年譜」（12×21）十葉、一～十。葉2まで御本と版面の磨滅亀裂も一致し、「玄」を缺筆するが、葉3以後は異なり、「貞」等すべて缺筆せず。補配の可能性あり。なお、『北京圖書館古籍善本書目』等はいずれも「四十三卷、別集二卷、外集二卷、年譜一卷、附録一卷」とするが、「年譜」は卷首、「諸賢姓氏」の後にある。

凌本は「年譜」欠落。早くに散佚したのではなく、卷首そのものが「配明初刻本」であって、すでにその明版にはなかったのである。凌本の卷首と同じ版である台湾故宮#5818は「別集」まであって「別集」以下を散佚するが、いっぽう北京図書館蔵#10212・日本国立国会図書館蔵本（WA35-89）等は「年譜」一卷が「外集」の後、「附録」の前にある、つまり他の12行本とは違って卷首にはなかった。この両類は、後述するように「目録」部分を異にするが、極めて類似しており、前者の類も「年譜」を備えていたのではなからうか。そうならば凌本も本来は卷首に備えていたのであるが卷首が散佚して前者の類で補配したために「年譜」は卷首にも「附録」前にもなく、欠落しているのである。

海本は卷首等を欠く。

8：「増廣註釋音辯唐柳先生集目録」

李本は「諸賢姓氏」の後に「増廣註釋音辯唐柳先生集目録」12行×21字、二九葉、一～廿九あり。「第四十五卷」の後に「外集上」・「外集下」・「附録」。版心は「殳目」・「柳目」等。宋諱は不徹底ながら「弘」・「貞」等を缺筆。「第～卷」の形式は正集中では「卷之～」に変わる。元明間の通修本では「目録」中・正集中ともに「卷之～」。

御本は「年譜」の次に「目録」(12×21)二九葉、一～廿九。「第四十三卷」の後に「別集上」・「別集下」・「外集上」・「外集下」・「附録」。版心題は「殳目」・「柳目」等。葉29a(「附録」)のみ版心上方に大小字数あり。これはこの部分の版本を失ったことによる後人の追刻であろう。末葉の下左に蔵書印「吳越王孫」あり。「貞」字を缺筆。

袁本は「年譜」の次にあり。「貞」字の缺筆、葉29a版心上部の大小字数、他の特徴においても、御本と同版のように見える。

凌本は「年譜」を欠落するために「諸賢姓氏」の次に「目録」があるが、本来「目録……配明初刻本」なのであって御袁両本と版式を全く異にする。「目録」は13行×23字、二段組み、計十七葉、17aは「卷四十三」の「春懷故園」詩で終わり、三行空けて「増廣註釋音辯唐柳先生集目録畢」とあるが、同じく「姓氏畢」を有する、先の台湾故宮#5818では、「春懷故園」詩の後に「別集」・「外集」・「附録」の目録が続き、計十八葉、18aは文安礼「柳文年譜後序」で終わり、二行空けて葉末行に「増廣註釋音辯唐柳先生集目録畢」とある。したがって巻首は台湾故宮#5818と北京図書館蔵#10212・日本国会図書館蔵本(WA35-89)とで異なる。李本と御袁両本はすでにこれと異なり、また「畢」字もなし。末葉に鈐印「乾隆御覽之寶」・「天祿琳琅」あり。なお、元明間の一本の「目録」は「卷之四十三」の後にさらに「別集上」・「別集下」・「外集上」・「外集下」・「附録」あり、13行×23字、計十八葉、末は「増廣……目録畢」。

9：正集

李本は「卷之四十五」で終わり、「目録」にいう所と合致する。宋諱の缺筆は「廓」字に至る。「大小字数」なし。正集中では「卷之～」に変わるが、ただ巻21のみ「巻第～」に作る。鈔本さらに御本以下明刊本まで同じ。宋原刊本から継承された誤刻か。

御本は「卷四十三」で終わり、「目録」に合致する。行款は李本と同じであるが、字様は明らかに異なる。故宮の解題に「四周雙欄、間亦作左右雙欄」というが、左右雙欄の方が圧倒的に多い。また解題にいう「中縫上方偶記大小

數」は多くなく、卷18の全葉と卷首「目録」・卷14の一葉のみ。卷14葉14の版心中縫「卯文十四」下の表(14a)に小字で「二ノ八十」(大字280)、裏(14b)に小字で「小二ノ八」(小字208)とあって葉14の正文と註文の字数を示しているが、しかし「目録」(29a)と卷18(全13葉)では版心「中縫上方」の表(a)のみにあって「大四、廿小、廿七」(大字420、小字127)のような形式に変わっている。袁本・凌本も同じ。このような版式の葉と巻は追刻ではなからうか。

故宮の解題にいう「較原目少「聞黃鸝」……原刻即缺」について、卷43葉19b「龜背戲」詩の後は「春懷故園」詩の末で版心には葉第「廿」とあり、「目録」にはその間に「聞黃鸝」等が見えるから、落丁は李本の葉20から葉23までの四葉にも及ぶ。ただ卷22葉9のみは配抄であり、『天祿琳琅書目後編』Aにいう「闕補卷二十二,九」に合致する。天祿琳琅に蔵される前から缺失していたのであって「原刻即缺」ではない。

いずれも半葉12行21字。小字双行同。左右双辺(偶有四周双辺)。版心は細黒口、双黒魚尾、魚尾相隨(偶有相對)、上魚尾下記書名卷第(如「柳文廿八」或「卯文廿八」「柳廿八」「卯廿八」「木廿八」等)、下魚尾下記葉次。註者の姓は墨蓋子あるいは墨圈で白文別出(如「潘云」「張云」「童云」「元注云」「潘本」、不作「潘曰」)。ただし御本の「別集」下巻、凌本の卷首・卷3・4・32~38(補配)を除く。しかし45卷12行本と43卷12行本は43卷までを共有するものではない。つまり李版と御本等は同版ではない。御本・袁本・凌本が部分的に同版であることは版面状態の一致から明らかである。しかし卷14葉9b・10a中央横のような瑕・磨滅等の顕著な特徴が存在する部分のみの比較でしか認定できず、全体に及ぶものではない。

10: 別集

李本は「非國語」二巻を正集に入れた45巻本であって「別集」はない。毎巻の首・末ともに「増廣註釋音辯唐柳先生集卷之幾」に作るが、正集・外集・附録の毎巻首尾計96(48×2)箇所中ただ卷44の首行のみ「増廣……先生文集卷之四十四」に作って「文」字を加える。鈔本も同じ。

御本は正集43巻の後に「附録」一卷・「外集」上下二巻と続く。故宮の解題は「四十三卷別集二卷附録一卷」として「外集已佚」というが、欠落しているのは「別集」であって前述の如く北京図書館蔵#10712がそれに当たる²³。任莉

²³「清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」(『島大言語文化』35、2013年) p12-13。

莉「柳宗元文集版本考」ではこの解題を祖述しながら「此本除『外集』已佚之外」の部分で「是本除『別集』二卷已佚外」に修正している。解題では指摘されていないが、御本では「附録」・「外集」の編次が前後顛倒しており、「別集」の欠落はこのことと関係があるかも知れない。これはマイクロフィルムによったものであり、本来の冊第が正しく反映されていない可能性もある。『天祿琳琅書目後編』では『御題増廣註釋音辨唐柳先生集』を「『正集』四十三卷、『別集』二卷、『外集』二卷、『附録』」²⁴とする。

御本の「別集」は北京図書館蔵#10712。毎巻の首・尾ともに「増廣註釋音辯唐柳先生集卷之幾」に作るが、李本の巻44に当たる「別集」上巻の首のみ「増廣註釋音辯唐柳先生文集卷之別上」に作る。96箇所中わずかに一箇所のみが李本と一致するのは御本と李本との翻刻関係を示す痕跡である。なお明刊本には「……文集卷別上」・「文集別上」等に作るものがある。

行款は正集と同じく12行21字であるが、ただ末葉13bのみ11行。末葉であることに因る。

袁本も御本と同じく首葉1aは「増廣註釋音辯唐柳先生文集卷之別上」、末葉13bは11行。

凌本は「別集」を欠く。

11：附録

李本は末葉15a第10行で正文が終わり、末空二行、つまり半葉12行であるが、次の15bは11行に作る。

御本も同じくこの半葉のみ11行。ただし巻終を示す「増廣註釋音辯唐柳先生集附録」一行は李本・鈔本では15bの中ほど、第6行にあるが、御本等では15bは第4行で終わり、第2行にある。

袁本・凌本ともに御本と同じく15bは第4行で終わり、第2行に「増廣註釋音辯唐柳先生集附録」一行があるが、第5行以下には界線はなく、御本と異なる。袁本と凌本は罫線の磨滅・寸断等の版面状態も同じ。

12：宋諱缺筆

李本では宋諱缺筆は「廓」字に至る。寧宗の諱「擴」と同音の嫌名を避けたもの。ただし計23例中、巻2葉1b行8、巻2葉8a行2、「年譜」葉1b行3の3

²⁴『天祿琳琅書目後編』（上海古籍出版社2007年）p395。

例であり²⁵、不徹底ではある。

御本は解題に「宋諱玄、朗……慎、敦諸字偶缺末筆」といい、また「是本宋諱遇“廓”字皆不缺筆，始刊於光宗時。『寶禮堂宋本書録』載是書稱“書首陸氏「序」文後尚有潘緯「序」文，此本則亡，蓋已佚去。緯「序」作於乾道丁亥，其年距光宗止二十餘年，以此推之，潘書成後，未久坊賈即取而合刊之」ともいう。後文は『寶禮堂宋本書録』²⁶の「是本宋諱遇“廓”字皆不避，蓋刊於光宗之世。潘緯「序」作於乾道丁亥，書成僅二十餘年，坊賈即取而合刊之」を援用したもの。

御袁凌三本は「廓」字を缺筆せず。「敦」字は集中に頻出し、御袁凌三本とも明らかに末一画が缺筆されている。それは巻11～13までの残本である海本でも確認される。『天祿琳琅書目後編』Aが「較其闕筆字，的是南宋中葉本」という所以であろうが、しかし缺筆は徹底していない。巻首「諸賢姓氏」と巻1に見える「張敦頤」の「敦」がそうである。錢大昕「此本於“敦”字尚未缺筆，當刊行於乾道、淳熙之朝矣」というのはこのような43巻本ではなかったか²⁷。「敦」は光宗（1189-1194）の諱「惇」を避けたものであるが、寧宗（1194-1224）諱「擴」の前に当たり、これのみに拠って考えれば45巻12行本よりも43巻12行本の方が早く成立したことになる。しかし「敦」字が頻出するのに対して李本＝45巻12行本で「廓」字の缺筆が不徹底にして僅かに3例に過ぎなかったことを考えれば、43巻12行本が「廓」缺筆を見落とした可能性は十分あり得る。このような宋諱缺筆のみで年代を考えるならば、李本より御本等、つまり45巻本よりも43巻本の方が早く成立したことになるが、御本等には「敦」を缺筆しない部分もある。宋諱缺筆は一般的に信じられているほどには決定的な根拠にならない。

以上によって45巻12行本と43巻12本の特徴と相違はほぼ明らかになった。ただし43巻12本四種は全同ではない。

13：字様と版面状態

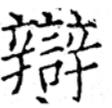
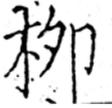
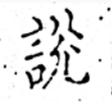
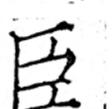
45巻本の李本と御本等四本の43巻本は字様が異なること、歴然としている。共に「敦」を缺筆する巻1葉1aでいえば、第1行の「増」字において李本は

²⁵ 詳しくは「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『增廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻12行本考」（『島大言語文化』33、2012年）p12。

²⁶ 『中國歷代書目題跋叢書第二輯』（上海古籍出版社2007年）所収、p287。

²⁷ 『清代民国私家藏『增廣註釋音辯唐柳先生集』考』（『島大言語文化』36、2014年）p2。

「會」の上部を「ク」の如く作るが、御本等は「八」に作る。また、「童宗説」等の註者の姓と名を区別して名をより小さく書く通例で、「説」字においては四本共に「兌」部分を「兗」に作る点で同じであるが、李本は「允」の上を「ハ」に作るのに対して、御本等では右の「丶」が明らかに「く」の如く曲がっている。45巻本と43巻本が巻数を異にすることから容易に想像されるように改版であるならば両者で字体が異なるのは何ら不思議ではない。しかし同じ版式43巻12行本の間においても微妙な差異が観察される。図版を参照。

海本	凌本	袁本	御本	巻葉行
				01/1a/01
				01/1a/01
				01/1a/02
				01/1a/08
				01/1a/10
				11/1b/02
				11/1b/08

御本等は巻数・行款等の版式はもとより、宋諱缺筆から字様筆致に至るまで李本と瓜二つであるが、仔細に観察すれば同版とは認めがたい。比較的顕著に現れているのが巻1葉1aの「辯」・「柳」・「説」・「負」・「臣」、巻11の「亂」等である。「辯」字（ℓ 01）は、右の「辛」部分の「一」が御本と凌本は右上がりであるが、袁本は右下がりであり、「柳」字（ℓ 01）の「夕」部分では御本と凌本は頭が短くて上字の「唐」との間隔が詰まっているが、袁本は頭が長くて間隔が広い。「説」字（ℓ 02）の「し」部分で袁本・凌本は撥ねが短く、御本は長い。「負」（ℓ 08）は「刀」部分の「ノ」が袁本では直線的であり、「臣」（ℓ 10）の「丁」部分の「丨」が袁本では右から左に傾く。上下左右の長短は刷り具合や紙質等によって微妙に差異が生じるが、このような類いは多くが刀刻そのものに起因する。

海本は巻1を欠くために残存する巻11で比較すれば、李本との相異の多いことや袁凌本との相似によってやはり43巻本であったと推測される。李本の「遷」字（1bℓ1）を海本が御本等と同じく俗字「迂」に作るのがそれである。ただし海本は御袁凌三本の中でも袁凌二本に近い。最も顕著なのは「亂」字の「ハ」部分である。今、御本と比較して相異の認められるものを表にして掲げる。

音辯本43巻12行本の字様比較					
巻葉行	「字」	御本	袁本	凌本	海本
巻01 葉1a	ℓ 01 「辯」	○	△	○	/
	ℓ 01 「柳」	○	△	○	
	ℓ 02 「説」	○	△	△	
	ℓ 08 「負」	○	△	○	
	ℓ 10 「臣」	○	△	○	
巻11 葉1b	ℓ 02 「臣」	○	○	▽	○?
	ℓ 08 「亂」	○	△	△	△
版匡	横	18.5	18.9	?	18.3
	縦	12.5	12.5		12.2
○=御本に近い；△、▽=御本と異なる；/ =欠落					

総じて言えば四本とも同版とは認めがたい。同版異版の鑑定にはいくつかの側面と方法がある。先ず、版面の瑕・亀裂・磨滅等の状態は有力な一つである。御・袁・凌の三本には字様は固より版面の磨滅・亀裂部分も一致する巻葉が存在し、陸「序」・「諸賢姓氏」・「目録」や「年譜」一部では御本と袁本

が（凌本の巻首は補配）、「附録」では袁本と凌本が一致しているから同版と認められるが、それは全巻全葉に及ぶものではなく、巻01葉1・巻11葉1の字様は御本・袁本が異版であることを示している。海本については『中國古籍善本總目』等は凌本と同版とするが、御袁凌三本共通して現存する巻葉、たとえば巻11葉1の版面状態を仔細に観察すれば、凌本ではなく、袁本と罫線の亀裂が一致するから同版であること疑いない。字様が酷似しているのもそのためである。海本は、少なくとも残巻部分は、凌本と同版ではない。版框のサイズも手掛かりの一つであるが、残念ながら御本・袁本・海本しか知られない²⁸。両本が縦で4mm差があることは異版を支持する。しかし同一位置を測ったとしても、湿度による紙の伸縮や版匡の磨滅、墨の剥落・滲漏・稀淡によって2mmくらいはズレが生じる。況や測定者が異なれば±2mmくらいは誤差の範囲である。そこで字様において微細な相異が観察され、その原因が刷印の加減や紙質による差などではなく、刻字の筆勢そのものにあるならば、やはり同版であるとは認めがたい。正確には全巻全葉に亘って丹念に比較する必要があるが、四本間に同版と異版が共存することはすでに明白であるから、43卷12行本は全巻に及ぶ覆刻ではないとしても、少なくとも部分的に数回補刻を繰り返していると考えねばならない。

II 45巻本と43巻本の先後関係

45巻本と43巻本の違いはひとえに「非國語」2巻を正集とするか別集とするかの点にある。一般的には、別集は正集とは別に存在していた、たとえば『非國語』は単行していたが後に文集に加えられた、と考えられよう。ちなみに劉禹錫編30巻本つまり唐原本の系統にある南宋永州刊33巻本は、正集は30巻のみであり、その後「非國語」2巻および「外集」1巻を加えて構成されている。すでに正・外を備える編成において「非國語」は「別集」と呼ばれてよい。そうならば43巻本が45巻本に改編されたのであり、43巻本の成立は45巻本の劉欽「後序」にいう理宗「淳祐九年（1249）」よりも前ということになる。また、先に言及したように、先後関係を宋諱缺筆から考えれば、張元濟がいう「是本宋諱遇“廓”字皆不避，蓋刊於光宗之世」は、43卷12行本が「廓」（寧宗）の前

²⁸ 御本は『國立故宮博物院宋本圖録』（國立故宮博物院編纂1977年、p148）に、袁本は『第四批國家珍貴古籍名録圖録（1）』（國家圖書館出版社2014年）#09982（p176）に、海本は館内のみにて閲覧可能なデジタル画像（索取号：線善785755）の表示データに拠る。

である「敦」（光宗）で止まることを意味するから、光宗朝（1189-1194）紹熙年間の刻ということになる。ならば「淳祐九年」よりも半世紀以上も早い。この説は、前稿で触れたように²⁹、『天祿琳琅書日後編』がいう蔵書印「大經」（正しくは「大筮」）が羅大經のものであるならば時間的にも矛盾しない。しかしこれには多くの疑問があり、43巻12行本紹熙間刻説は成立しがたく、かつ45巻本から43巻本に改編されたと考えねばならない。先の比較をふまえてこの点を再考する。

1：宋諱缺筆

宋諱回避について全体的にみて、李本=45巻12行本と御本等四本=43巻12行本はともに徹底していないが、その程度には歴然たる違いが認められる。まずこの相異によって先後関係を推測することが可能である。

理宗の諱「昀」字（註文を含む）は使用例がないが、その嫌名「勻」・「筠」は計6箇所、すべて缺筆していない。「擴」字も使用例はないが、その嫌名「廓」は計24字あり、その中で李本は明らかに3回缺筆しており、御本等はいずれも缺筆していない。したがって必ずしも「宋諱遇“廓”字皆不避」ではない。「惇」は一例、諸本はいずれも缺筆していないが、その嫌名「敦」字も24回も頻用されており、李本は固より御本等でも缺筆が多い。

帝号	諱	在位	年号
高宗	構	1127-1162	建炎 紹興
孝宗	昀	1162-1189	隆興 乾道 淳熙
光宗	惇	1189-1194	紹熙
寧宗	擴	1194-1224	慶元 嘉泰 開禧 嘉定
理宗	昀	1224-1264	寶慶 紹定 端平 嘉熙 淳祐 寶祐 開慶 景定

「敦」は巻1葉1aの首に掲げる「新安先生張敦頤音辯」以後頻出しており、御本等43巻12行本は多く缺筆するが、その前にある巻首の「諸賢姓氏」中の「新安張敦頤音辯」では缺筆していない。全体的に共に「不甚謹嚴」とはいえ、「敦」を含みそれ以前の宋諱において、李本が缺筆しているものを御本等が缺筆していない例は多い。たとえば巻10葉2aの「完」字（欽宗趙桓）、「年譜」8aの「敬」字（祖趙敬）等がそうである。およそ御本等の缺筆は必ず李本の缺筆に含まれており、李本の不缺筆を御本等が缺筆することはない。表「音辯本12

²⁹「清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」（『島大言語文化』35、2013年）p32。

行本の宋諱缺筆」を参照。この「不甚謹嚴」なる現象における相違は両者の先後関係を示している。御本等の不缺筆は李本のように缺筆していたものを底本としながら後人が見落としたことに由来すると考えられる。つまり御本等は李本の後に在る。

音辯本12行本の宋諱缺筆				○=缺筆；×=不缺筆；/ =欠落					
宋 諱	卷	葉	行	李	御	袁	凌	海	
玄 朗	玄	年譜	02b	04	○	○	○	/	/
		14	07b	07	×	×	×	×	/
		29	04b	02	×	×	×	×	/
		42	01a	06	×	×	×	×	/
	朗	年譜	09b	03	×	×	×	/	/
		42	04b	03	○	○	○	○	/
敬	敬	43	01b	04	×	×	×	×	/
		劉序	01a	09	○	/	×	×	/
		年譜	08a	09	○	/	×	/	/
		年譜	08a	01	×	/	×	/	/
		10	02a	08	×	×	×	×	×
弘 殷	弘	42	05a	09	×	×	×	×	/
		年譜	04b	05	×	×	×	/	/
		12	11b	08	×	×	×	×	×
		42	04a	09	×	×	×	×	/
恒	恒	14	08a	09	○	○	○	○	/
		14	16b	02	○	○	○	○	/
		28	01b	10	○	○	○	○	/
		29	02b	02	○	○	○	○	/
禎 貞	微	劉序	01b	02	○	/	×	×	/
		年譜	04b	08	○	×	×	/	/
		14	18a	05	○	○	○	/	/
		42	03b	12	○	×	×	×	/
	貞	劉序	01a	07	○	/	×	×	/
		年譜	03a	07	○	○	×	/	/
		01	01a	09	○	○	○	○	/
		29	07a	02	○	○	○	○	/
		42	01b	03	○	×	×	×	/
		42	01b	07	○	○	○	○	/
桓	桓	10	09a	07	○	○	○	○	○
		14	18a	09	○	○	○	○	/
		41	09b	06	○	○	○	○	/

桓	完	劉序	01a	06	○	△	×	×	△
		10	02a	02	○	×	×	×	×
		20	07a	06	○	○	○	○	△
		20	07b	11	○	○	○	○	△
		28	01b	10	○	×	×	×	△
惇	敦	惇	05a	01	×	×	×	×	△
		姓氏	01b	01	○	×	×	×	△
		01	01a	03	○	○	○	○	△
		11	01a	10	○	○	○	○	○
		11	02a	10	○	○	○	○	○
擴	廓	年譜	01b	03	○	×	×	△	△
		02	01b	08	○	×	×	×	△
		02	08a	02	○	×	×	×	△
		10	02a	05	×	×	×	×	×
		11	01b	11	×	×	×	×	×
昀	勻	05	03b	06	×	×	×	×	△
		15	05b	12	×	×	×	×	△
		38	09a	04	×	×	×	×	△
	筠	02	06a	09	×	×	×	×	△
		43	11a	07	×	×	×	×	△
		43	16a	09	×	×	×	×	△

しかし御本等の間においても宋諱缺筆で相異が見られる。それは巻首の「年譜」において最も顕著である。ともに「弘」(4b)は缺筆せず、「弘」(5a)を缺筆する、つまりわずか半葉の間近、見開きの左右にありながら整合性を欠くという共通性がある一方、御本は「貞」計22字を缺筆し、袁本は全く缺筆していない。缺筆されたものに拠りながら正字に改めているのである。「貞」は年号「貞元」・「永貞」として「年譜」中各条の冒頭に置かれて頻出し、その存在は一目瞭然である。にも関わらず、「貞」を尽く缺筆していないのは、もはや単なる見落としなどではなく、見かけ上は「不甚謹嚴」ではあっても缺筆意識そのものが消失していることを露呈している。このような缺筆意識の欠如状態は宋朝ではありえず、元代に入って以後に出現する。この段階では、御本等に缺筆が皆無ではないこと、著しい相異が観られることに留意しておきたい。先の「字様」でも指摘したように、御本等43巻12行本の間には同版と異版が共存しており、これは成立の先後を反映しているかも知れない。御本は「貞」字を缺筆している点において李本に近いことから袁本等よりも前に在るといえる。また、同版の巻葉において、巻14葉9b・10a中央横の瑕は御本よりも袁本・凌

本の方がやや鮮明であり、さらに罫線の磨滅度は多くの巻葉において御本・凌本・袁本の順で高い。

2：増廣註釋

音辯本の系統にあって45巻本のみに残る劉欽「『河東柳先生文集』後序」に「音釋之有正有訛，讎校之或詳或略，則不可以無辨。今怡堂劉君之於是編參攷諸說，會其至當，雖不加一辭，而是否之間瞭然易見」という。これは、『河東柳先生文集』45巻本についてすでに存在した「音釋之有正有訛，讎校之或詳或略」に対して初めて「參攷諸說，會其至當」したことを謂い、その「諸說」とは「諸賢姓氏」と巻1葉1の首3行に示す「童宗說註釋」「張敦頤音辯」「潘緯音義」を指し、それらに拠って「怡堂劉君」が「増廣註釋音辯」したと考えられる。註文は補配部分を除いて李本と御袁凌海四本は一致する。

ただし劉欽「後序」は「怡堂劉君」が「參攷諸說，會其至當」したものを『河東柳先生文集』と呼んでおり、『増廣註釋音辯唐柳先生集』ではない。また、「後序」は文字通り集後に附せられるものであるが、李本では巻首で版心に「序文」とする部分に置かれている。これらは後人の編集の手が加わったことを意味する。それはこれを刊刻した建陽の書坊ではなかろうか。書坊が劉怡堂輯註本を底本として、巻首「序文」に一括すべく劉欽「後序」を移したとは考えられないか。ちなみに音辯本でも「後序」の類は集末の「附録」巻の後半に集められている。

次に、「諸賢姓氏」にも不自然な点が見受けられる。そこには「童宗說註釋」「張敦頤音辯」「潘緯音義」三子の他に「劉禹錫編」「穆脩敘」「蘇軾評論」「沈晦辯」「汪藻記」「張唐英論」の六子が挙げられているが、「劉禹錫編」以外の「穆脩敘」「沈晦辯[敘]」「汪藻記」は「附録」に収められている。「蘇軾評論」と「張唐英論」については、巻2「瓶賦」題下に「東坡云：揚子雲「酒箴」有問無答。子厚「瓶賦」蓋補亡耳。子厚以瓶為智，幾於信道知命者」、巻2「牛賦」題下に「東坡云：嶺外俗皆恬殺牛，海南為甚。乃書子厚「牛賦」遺瓊州僧道贇，使曉諭之」、巻12「先君石表陰先友記」末に「東坡云：柳子厚記其先友六十七人於其墓碑之陰。考之於傳，卓然知名者蓋二十人」、巻17「李赤傳」末に「東坡有「李赤詩」題跋」、巻19「三戒」末に「東坡云：予讀柳子厚「三戒」而愛之，乃作「河豚魚」「烏賊魚」二說，并序以自警」、巻9「故御史周君礪」題下に「張唐英云：御史必周子諒也，事見『唐（書）』『張九齡傳』』と見えるが、これらはいずれもわずか一条の簡単な紹介の註に過ぎず、固より「蘇軾評論」「張唐

英論」そのものではない。じつは蘇軾の「評柳子厚詩」「論柳子厚詩」「書柳文瓶賦後」「書柳子厚牛賦後」「書李赤詩後」「引説先友記」「讀柳子厚三戒」等々や張唐英「發明周御史論」を一括して集めているものがある。魏仲舉刻五百家註本の「附録」巻2がそれである。これこそ「蘇軾評論」「張唐英論」というべきものである。なお「穆脩後序」「沈晦後序」は「附録」巻4（巻3）に³⁰、「汪藻記」は巻首「序傳碑記紀」に収める。音辯本にも「附録」はあるがそこには見えない。「附録」の葉第は連続しているから欠葉はない。音辯本の「附録」は五百家註本の「序傳碑記紀」と「附録」巻4（巻3）にはほぼ重なる。このように音辯本の「諸賢姓氏」の内容は実態に合わない極めて不自然な書き方であり、五百家註本を真似て見栄えよく整えているように思われる。書坊のしかねないことである。また、五百家註本には巻首に「柳集評論詰訓諸儒名氏」があつて百余名を挙げています。音辯本の巻首にある「増廣註釋音辯唐柳先生集諸賢姓氏」もこれに倣ったものに違いない。

これらは輯註者本人ではなく編集者つまり書坊が、先行する建陽魏氏「家塾」刻本の方法に倣い、しかし特徴を出すことを狙ったものに相違ない。音辯本と魏氏五百家註本の両輯註本における最大の違いは、魏氏が採らない潘緯『柳文音義』から音辯本が積極的に採っている点にある。巻首に潘「序」を掲げ、「諸賢姓氏」や巻1首に「潘緯音義」を列する所以である。かくして建陽の書坊は魏氏刻『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の「音辯唐柳先生文集」に対抗して『増廣註釋音辯唐柳先生集』と題して刊行したのではなからうか。そうであるならば今日に伝わる李本の成立は劉欽「後序」にいう「淳祐九年」以後のことである。「怡堂劉君」については未詳であるが³¹、「～堂」という名は書坊に多く、かつ建陽麻沙の書坊で劉氏は有名であったこと³²、また当時にお

³⁰ 四庫全書本『五百家註柳先生集』は「附録」を全4巻として巻3に「序傳碑記紀」を混入している。「序傳碑記紀」は『天祿琳琅書目』巻3「宋版集部」(p72)「新刊五百家註音辯唐柳先生文集」の著録では「前載」とし、兪良甫覆刻本でも巻首に収める。

³¹ 「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻12行本考」(『島大言語文化』33、2012年) p35-37。

³² 方彦寿「建陽劉氏刻書考(上)」(『文獻』1988-2)「宋元劉氏刻本綜録」(p200-201)・方彦寿『建陽刻書史』(中国社会科学出版社2003年)は南宋建陽劉氏について「家塾型私家刻書」(p81)に劉仲吉宅・劉將仕宅・劉元起家塾之敬室・劉日新宅三桂堂・劉通判宅仰高堂・劉叔剛一經堂を、「方興未艾の書坊刻書」(p92)に劉智明・劉仲立・劉誠甫・劉德亨・劉氏天香書院を挙げる。また李致忠『中國出版通史(4)宋遼西夏金元卷』(中国書籍出版社2008年)「建安出版家劉氏」p109に見える。

いて輯註が書坊においてなされたことなどを勘案すれば、怡堂は劉氏の営む書坊の号であったようにも思われる。そうならば淳祐九年の刊刻である。現時点では資料を欠き、断定を保留せざるを得ないが、いずれにしても音辯本では45巻本が初刻である。

3：「外集」

李本に限らず音辯本は穆修・沈晦の「後序」を「附録」に収めており、そのことは他でもない音辯本が沈本の系統にあることを示す。また、沈晦「四明新本柳文後序」（政和四年1114）に「凡四本：大字四十五卷，所傳最遠，初出穆脩家，云是劉夢得本。……今以四十五卷本為正，而以諸本所餘作外集」というように、「外集」は穆本に未収の作を沈晦が拾遺したものであり、沈晦本は穆修「舊本柳文後序」（天聖九年1031）に「夔州（劉禹錫）前序其首，以卷別者凡四十有五」という正集45巻本であった。ちなみに韓醇詰訓本も45巻本であり、「外集」二巻の末に沈晦「序」を置く³³。御袁凌三本にも「外集」があり、「童宗說註釋」「張敦頤音辯」「潘緯音義」の註文はその中にも多く引かれている。ちなみに「童云」2条、「潘云」7条、「潘本」1条、「張云」2条、いずれも李本・鈔本と同じ。したがって御本等つまり43巻本も沈晦本つまり45巻本を祖本とするのであるが、他でもない李本こそ45巻本であった。このことも45巻本の後に43巻本が出たと考える有力な根拠たり得る。

4：劉「序」と陸「序」

李本・鈔本は巻首に劉禹錫「序」を、御本・袁本は陸「序」を冠す。凌本の巻首は後人による補配、海本は巻首を欠落。劉「序」の存在は、沈晦が「『柳文』出自穆家，又是劉連州舊物，今以四十五卷本為正」と信を置いたように、穆修『柳集』45巻本を正統化するのに欠くことのできない一篇であり、いっぽう陸「序」は潘緯『柳文音義』の為に作られたものに過ぎない。陸「序」と潘「序」はほんらい一組である。李本は劉禹錫・陸之淵・潘緯・劉欽の四「序」を一括して巻首に集めて版心に「柳文序」と題し、葉第も「一」から「七」まで連続する。ちなみに穆修・沈晦の「後序」は「附録」に置く。御本は劉「序」を欠いて陸「序」の版心「柳序」に「一」・「二」とする。つまり「柳序」部分は陸「序」から始まっていた。御本は、たとえ落丁があるとしても、劉「序」

³³ 四庫全書薈要本に拠る。文淵閣・文津閣各本の「外集」の編次には混乱がある。詳しくは「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷12行本考」（『鳥大言語文化』33、2012年）p27。

が巻頭に冠せられていて後にそれが散逸したものではないことになる。袁本は劉「序」を「諸賢姓氏」の後に置くが、陸「序」の葉第は「二」で始まっており、劉「序」の葉第は「一」字のように見える。凌本の劉禹錫「序」は後人が補配したものであるが、同版では陸「序」・劉「序」・「諸賢姓氏」の順になっている。つまり諸本は表のような葉第に復元される。

葉 第	李本	御本	袁本	凌本
劉禹錫「序」	1	[5]	1?	3
陸之淵「序」	2・3	1・2	2・3	[1・2]
潘 緯「序」	4・5	[3・4]	4・5	
劉 欽「序」	6・7			
「諸賢姓氏」	8	6?	6	4

そこでこの葉第順に並べ替えると次のような種類と変遷が想定される。

I	李本・鈔本	劉「序」	陸「序」	潘「序」	劉欽「後序」	「諸賢姓氏」
II	袁本	劉「序」	陸「序」	潘「序」		「諸賢姓氏」
III	御本		陸「序」	潘「序」	劉「序」	「諸賢姓氏」
IV	凌本(補配)		陸「序」		劉「序」	「諸賢姓氏」
	元明刊本		陸「序」		劉「序」	「諸賢姓氏」

元明間の43巻13行本はいずれも陸「序」を前に掲げて潘「序」を欠き、劉「序」を後に置く、あるいは欠く。通行本では四部叢刊本がそうである。そこで、欠落でないならば、「序文」の首位が劉「序」から陸「序」に換わってI・II・III・IVの順での推移が想定される。そうならば袁本は、43巻本であって固より李本・鈔本=45巻本とは異なるが、潘「序」を備える点において、また劉「序」を首位に配する点において、同じ43巻本である御本よりも成立が早いかも知れない。しかしこれは「年譜」に観られた宋譜缺筆での可能性、御本が先、袁本が後と矛盾する。逆に御本は劉「序」だけでなくほんらい陸「序」も欠落していて後に補刻されたと考えることも可能である。現時点ではこの矛盾を説明することができないが、いずれにしても「柳序」内の順序から観ても、李本が先、御本等が後であり、また御本等が同版でないことも確かである。

御本等が共に劉欽「後序」を欠いているのは、本来喪失していた可能性もあるが、陸「序」・潘「序」にいう「乾道三年」刊本であることを装うために書坊が弄したものであろう。錢大昕『潛研堂序跋』(嘉慶十一年1806)巻9「跋柳

河東集』³⁴に「潘氏『音義』成於乾道三年，此本於“敦”字尚未缺筆，當刊行於乾道、淳熙之朝矣」、劉承幹『吳興劉氏嘉業堂善本書影』（民国一八年1929）「目錄」の「卷五 集部・宋本十九」³⁵の解題に「『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十〔三?〕卷附『外集』：宋乾道刊本」、乾道間刊本とするものは多い³⁶。

以上によって李本=45巻12行本が先、43巻12行本が後の成立であることは明らかであり、さらに李本の成立は劉欽「後序」の淳祐九年以後の可能性さえある。したがって紹熙間刻説は成立しない。また、45巻12行本から43巻12行本に改編されたならば、13行本は43巻12行本から改編されたはずである。つまり45巻12行本>43巻12行本>43巻12行本の成立順になる。

以上の考察をふまえて12行本5部の異同をまとめて表にして示す。

編次・版式等\12行本		音辯本『柳集』12行本の比較				
		45巻本	43巻本			
		李 本	御 本	袁 本	凌 本	海 本
劉禹錫「序」		①12×21	/	④12×21	①12×20	
陸之淵「序」		②8×16	①8×16	①8×16		
潘 緯「序」		③6×12	/	②6×12		
劉欽「後序」		④6×9	/	/		
諸賢 姓氏	行款	⑤6×17	②6×17	③6×17	②6×16	
	末行	/	/	/	姓氏畢	
年譜	行款	⑦12×21	③12×21	⑤12×21		
目録	行款	⑥12×21 一段	④12×21 二段	⑥12×21 二段	③13×23 二段	
	卷次	第～巻		1-43	卷之～	
	末行	1-45	別・外・附まで		43まで	
		目録			目録畢	
正集	卷数	集卷之～				
		1-45	1-43			
	行款	12×21				
	缺葉		v43 p20a ～p23b			v01-v09 v14-v45 (存v10-v13)
	缺補		v22 p09ab		v03-v04 v32-v38	

³⁴ 『中國歷代書目題跋叢書』（上海古籍出版社2010年）3輯所収p159。『潛研堂文集』（嘉慶十一年）に拠る。

³⁵ 『珍稀古籍書影叢刊之四』（北京図書館出版社2003年）p4。応長興・李性忠主編『嘉業堂志』（国家図書館出版社2008年、p103）にも見えるが、書影はなし。

³⁶ 『南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻12行本考』（『島大言語文化』33、2012年）p30。

別集	上巻首行	文集巻之～					
	下巻末13b	12×21	11×21				
附録	末15b	11×21		4×21			
	「…附録」	第6行	第2行				
宋諱 闕筆	劉禹錫「序」	○		×	×		
	「年譜」	○		×			
	「目録」		○		×		
	敦	「姓氏」01b	○	×			×
		正集中	○				
	廓	「年譜」p01b	○	×			
		正集中	○	×			
	字様	v01p1,v11p1	A	B	C1		C2
大小 字数	目録 p29a	×	○		×		
	v14p14ab	×	○				
	v18 全葉	×	○				
雙邊		左右（偶有四周）					
版心		双黒魚尾、細黒口					
版框	横	18.5	18.5	18.9	?	18.3	
	縦	12.6	12.5	12.5	?	12.2	

IV 音辯本諸版の先後関係と善本

版本としての価値・信頼性に直接関係して最も重要なのが文字の異同である。以下、先に挙げた李本・日本聰達鈔本の45巻12行本と御本・袁本・凌本・海本の43巻12行本を対校し、具体的な異同と諸本の間関係を見ていく。これらはいずれも12行本であるが、同じ43巻本に属しながら13行であるという諸本とも対校することによって43巻12行本の特徴をさらに明確にできるであろう。これは勢い43巻13行本の特徴と種類の究明につながる。ただし元明間に逡修覆刻を重ねて多くの版がある。先に指摘したように編集形式上顕著に特徴が窺えるのが「諸賢姓氏」と「目録」であり、今その形式的異同に基づいて知り得た版本を分類する。表と図版を参照³⁷。

³⁷ 版框そのものも大小が異なるが、図版では文字を比較するために比率による調整はせず、ほぼ同サイズにした。

音辯本諸版本の分類									
◎=牌記「正統戊辰善敬堂刊」；●=墨釘；○=有；×=無；▲=罫線無し；△=罫線有り									
姓氏 畢	牌 記	目録		諸版本、所蔵等	卷	行/字	版 匡 縦×横	類	
		段	止						
×		1	附	李本（淳祐九年序刊）	45	12/21	18.5×12.6	A	
		2	附	御本、袁本、海本			18.9×12.5	B	
○	×	2	附	北京圖書館#10212、国会図書館WA35-89等	43	13/23	19.6×12.8	C	
			43	凌本（巻首）、台湾故宮#5818（沈贈）等				D	
			附	台湾中央圖書館#09755、北京圖書館#5066等				E	
×	◎	2	43	蓬左文庫#144-17、ハーバード大等 ³⁸	43	13/23	19.8×12.2	F	
				内閣文庫#315-4、#集4-2等、台湾中央圖書館#09754、北京圖書館#4405等（万暦三年補刻本）			9/18	G	
				北京圖書館#6251・#18407等			13/23	19.8×12.5	H
				台湾中央圖書館#09748・#09750等					I
				四部叢刊本等					J
×	×	2	43	台湾中央圖書館#09752、都立中央図書館#7992（正徳十年劉玉刻本）等	43	13/23	18.7×12.6	K	
				北京圖書館#5042、天津図書館#1514等「京本」 ³⁹			L		
○	×	2	43	蘇州図書館等		13/不等	19.7×13.1	M	

音辯本は輯註の依拠を示す「諸賢姓氏」を巻首に掲げるが、その末行頭に「姓氏畢」三字を有するものと無いものがある。なお、明刻の一本（G類）では「賢」字を「賢」に作る。A李本・B御本等の12行本には共通して「姓氏畢」が無いが、43巻13行本には有るものと無いものがあり、さらに「姓氏畢」の無いものには「諸賢姓氏」の末二行中央に木記（牌記）「正統戊辰（十三年1448）善敬堂刊」八字一行の有る無しの二種類がある。ただし無いものでも嘗て有ったことが疑われる痕跡を留めているものもあり、また木記本には13行本の他に版式を異にする9行本がある。この9行本の木記では「正統戊辰」と「善敬堂刊」の間に横の白線がわずかに見える。日本内閣文庫#315-4では比較的顕著。これは埋木した痕跡ではなからうか。次に「目録」の特徴では、一段

³⁸ 柳州市政府地方誌辦公室編『柳宗元著作版本圖考』（廣西人民出版社2012年）p75。版本は蓬左文庫蔵本と同一であるが、ハーバード大学燕京図書館蔵本には「善敬書堂：柳文集註」「善敬書堂：増廣註釋柳文續集」の扉葉があり、これが初刻本の姿を伝えている。

³⁹ 「序」・「目録」では『京本唐柳先生文集』、「諸賢姓氏」では『京本註釋音辯唐柳先生集』、毎巻首行では『京本校正文釋唐柳先生集』と称す。方彦寿『建陽刻書史』（p444）に「京本」二字、毫無疑問は出版商為取得廣告效應、經過多方選擇後而隨意增添上去的。

か二段かの組み方の相異があり、さらに正集巻43で終わるか、さらに「別集」等を加えて「附録」で終わるかという相異がある。これらの特徴的相異に巻数・行款の相異が加わって多くの組み合わせがうまれる。

この他、『増廣註釋音辯唐柳先生集』と題する43巻13行本に「行字不等」(23字、26字)の一本=M類がある⁴⁰。他の音辯本は巻1第2行から童宗説註釋・張敦頤音辯・潘緯音義をいう3行を掲げるが、この一本は20巻13行26字本と同じくそれが無い。また、「行字不等」とは巻1～2・別集・外集が13行26字、巻3～43が13行23字であり、じつは20巻本の分巻では巻1・巻2は43巻本と同じ、巻3からズレて来るから、43巻13行本を20巻本で補配したもののよう考えられようが、巻1の字様は明らかに異なるから、補配ではなく、20巻本と底本として覆刻したものである。たとえば20巻本の巻1葉1a第4行の「臣負罪竄伏」に作り、「負」を「負」(員)に誤るなど、明白な誤字を踏襲しているが、「目録」は巻43の古今詩で終わり、しかも末は「目録必」(14b)に作る。これは「必」が「畢」と同音であることに因る誤り。また、多くの図書館で同版本を所蔵していることも補配本ではない証拠である。

現時点での調査によって編成形式上顕著な特徴的相異から分類すれば音辯本には10種類以上あったことになる。しかもすでに指摘したように43巻12行本の4本間においても異同が認められるからその数は更に多くなる。中には配補本・補刻本があるにしても、これによって音辯本が『柳集』諸本の中で最も流布した一本であることが知られよう。これらの全てを対象とすることは現状では困難である。そもそもどれだけの版本が存在するのか、それを把握するだけの情報を入手するにはまだ至っていない。今回は、12行本との関係を見るべく、比較的古いと推測される43巻13行23字本を対象を限定する。まず、末行に「姓氏畢」を有する種類として

C：北京図書館蔵#10212(項夢原旧蔵) ……【C1本】

C：日本国会図書館蔵#WA35-89 ……【C2本】

D：台湾故宮#003551(#5818沈贈) ……【D本】

また、「姓氏畢」を有さず、刊刻木記「正統戊辰善敬堂刊」を有する種類とし

⁴⁰『中國古籍善本總目(集部上)』(p1206下) #988「卷一至二、別集、外集為十三行二十六字、卷三至四十三為十三行二十三字」というのがそれ。上海図書館、三東省図書館、蘇州市図書館、安徽省博物館、湖南省図書館に収蔵。『第三批國家珍貴古籍名錄圖録(6)』(國家図書館出版社2012年) #08789 (p5)に蘇州図書館蔵本の書影(巻1葉1a)あり。

て

F : 蓬左文庫蔵 #114-17 …… 【F本】

木記を有さないが、木記を囲む二重の枠を留めており、その枠内の文字を削除して埋木し、墨釘になっているものとして

H : 北京圖書館 #18407 (姚元之 [1773-1852] 旧蔵) …… 【H1本】

H : 北京圖書館 #6251 (陳揆 [1780-825] 旧蔵) …… 【H2本】

の二本を、そのいずれをも有さないものとして

I : 台湾中央圖書館 #09748 …… 【I本】

J : 四部叢刊初編本 (上海商務印書館1929年) …… 【J1本】

J : 四部叢刊初編縮本 (台湾商務印書館1965年) …… 【J2本】

を用いる。I本は木記全体を削った痕跡があつて木記のあつた部分の罫線が消えており、J本は木記のあつた部分に罫線が引かれているから、埋木した、あるいは書き込んだものと想像される。J本の四部叢刊本は、台湾版(洋装本)にも扉に「上海商務印書館縮印元刊本」というが、「同じ四部叢刊本ながら、洋装本とは異なる」ことがつとに指摘されており⁴¹、そこで二種類に分けた。また、「諸賢姓氏」部分はJ本と同じで「姓氏畢」も木記もなく罫線を有するが、J本及び他の諸本とは字様が明らかに異なる類として

K : 都立中央図書館 #7992 …… 【K本】

を用いる。この類には集末に劉玉「重刊柳先生文集跋」1葉があり、「『韓集』之刻既成，再踰月，「柳集」亦成。……侍郎公作其始，方伯公相其成，玉竊校讎，以附名其末，亦何幸與。侍郎公張氏，名景暘，山陰世家；方伯公胡氏，名韶，鄱陽世家……正徳十年乙亥（1515）夏六月哉生明（3日），後學廬陵劉玉謹識」という。この時、合刊された『韓集』は『朱文公校昌黎先生集』。胡韶、字は大慶、成化二〇年（1484）進士、弘治十七年（1504）に呂祖謙『宋文鑑』150巻を重修⁴²、正徳十年に『醫林類證集要』10巻を刊刻⁴³。張景暘は「字廷宝、山陰人、弘治十二年進士」⁴⁴、正徳十三年から十五年まで潮州知府。「廬陵（吉州吉安）劉玉」については未詳。

⁴¹ 新海一『柳文研究序説』（汲古書院1987年）「『増廣註釋音辯唐柳先生集』校讎」p201。

⁴² 瞿冕良『中國古籍版刻辭典』（齊魯書社1999年）「胡韶」（p415）に詳しい。

⁴³ 『第二批國家珍貴古籍名録圖録（6）』#04597（p205）。

⁴⁴ 『日本藏中國罕見地方志叢刊（29）』（書目文獻出版社1991年）所収『〔嘉靖〕潮州府志』巻5「官師志」（9a、p224上）。

E類・G類・L類等は粗悪な明本で、恐らくF本以後の成立であるが、それらとの比較も試みればさらに興味深いことが知られるであろう。たとえば20巻本のE類は『朱文公校昌黎先生文集』20巻本と共に合刊されたものであり、朱校本の方は「弘治十五年（1502）王氏善敬書堂刻本」とされているが⁴⁵、音辯本は木記が無くて「姓氏畢」があり、「目録」が「附録」で終わる等の特徴からはむしろ音辯本のC類に近い。G類もF類と同じ「正統戊辰善敬堂刊」の木記をもつためにしばしば混同されるが⁴⁶、字様は稚拙であって誤字も多く、G類がF類より後出であることを数値化して証明することができよう。つまりE類はC類による、G類はF類による重修本と考えられる。しかもF類はC類より、G類はE類より粗笨である。しかしG類は43巻本であるが9行に、E類は13行本であるが行26字の20巻に、L類は43巻本であるが10行に改版されて、いずれも13行23字本ではないために、また本稿で確認する所となるが、行款変更は往々にして諸本との異字の増大を招いており⁴⁷、その比較は膨大な作業量になるために、今回は対象から除く。なお、版框は同一人による同一箇所測定ではなく、絶対の根拠とはならないが、G類・L類がやや大きく、A類・B類・K類がやや小さい。他は誤差の範囲に止まるといえよう。

さらに、『四庫全書總目』が「内府藏本」に拠るとする

文淵閣本 …… 【淵本】

文津閣本 …… 【津本】

とも対校することによって四庫本の底本がいずれに属すのか、あるいは最も近

⁴⁵ 瞿冕良『中國古籍版刻辭典』（齊魯書社1999年）「善敬堂」（p596）、『中國古籍善本書目（集部）』#1362-#1364（p115）、『（稿本）中國古籍善本書目（集部）』#799-#801（p1200上）、『中國古籍善本總目（集部上）』#799-#801（p1207上）、『第二批國家珍貴古籍名録圖録（7）』#05333（p256）、『第三批國家珍貴古籍名録圖録（5）』#08761（p291）など多いが、『圖録』には木記の書影もなければ、木記の言及もない。また、現に朱校本20巻本の台湾中央図書館蔵本#09706・北京図書館蔵本#15243・#6059、音辯本20巻本の台湾中央図書館蔵本#09755・北京図書館蔵本#5066にはそのような木記はない。

⁴⁶ 潘承弼・顧廷龍『明代版本圖録初編』（齊魯大學國學研究所1941年、文海出版社1971年影印）巻8「書林」が「明正統十三年戊辰（一四四八）善敬堂刊本」（p7）、方彥壽『建陽刻書史』（中國社會出版社2003年、p281）では9行本つまり本稿のいうG類を13行本つまりF類と混同している。

⁴⁷ たとえばL類について丁日昌（1823-1882）『持靜齋書目』巻4「京本校正音釋唐柳先生集四十三巻別集一卷外集一卷：元刊本」に「惟譌字泉涌」（張燕嬰点校『持靜齋書目・持靜齋藏書記要』中華書局2012年p338）。刊刻時期については後に莫友芝『持靜齋藏書記要』巻上（p653）では「明刊本」に訂正。

いのかを究明する。以上は音辯本の諸版であるが、さらに他の宋刊45巻本との関係を見るために、

韓醇『新刊詁訓唐柳先生文集』	……【韓本】
眉山刻『新刊増廣百家詳補註唐柳先生文』	……【眉本】
魏仲举『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』	……【魏本】
鄭定『重校添註音辯唐柳先生文集』	……【鄭本】
世綵堂廖瑩中『河東先生集』	……【廖本】

の五種とも対校する。韓本は宋本亡佚のため、それに拠った「清抄本（四庫底[抄]本）」⁴⁸とする北京図書館蔵#2038と四庫薈要本『柳河東集』⁴⁹を用い、魏本は宋本残巻（巻16～21、巻37～41）と宋本に拠った兪良甫による日本覆刻本を用いる。

まず一覧表を作成して掲げる。「○」は李本との同字を、「／」は缺字・脱字を、津本中の「\」は他本（韓本）による補配を、「断」等網かけは異字を、「田」等ゴチックは誤字を示す。

次に、この対校結果に基づいて相互関係を示すグラフを作成する。異文（誤字）、異体字、重畳字「二」の点において音辯諸本が李本といかに相異なるか、数量化して示した。刊刻時期は序・木記・跋等によってA = 李本（淳祐九年1249）、F本（正統十三年1448）、K本（正徳十年1515）、四庫本（乾隆四九年1784）は判明しており、また先に考証したように、B = 御本等はA本の後に、C本は更にその後でなければならない。

これによって段階的に変化していることが読み取れる。A = 李と鈔をⅠ段階、それにつづくB = 御本等をⅡ段階と呼ぶ。C1・C2・DはⅡ段階とF以後との中間に位置する。これをⅢ段階、F・H・I・JをⅣ段階と呼ぶ。Kと淵・津は共にⅢとⅣの中間に位置する。ただしKは大徳間の校定本、淵・津は清代の鈔本。

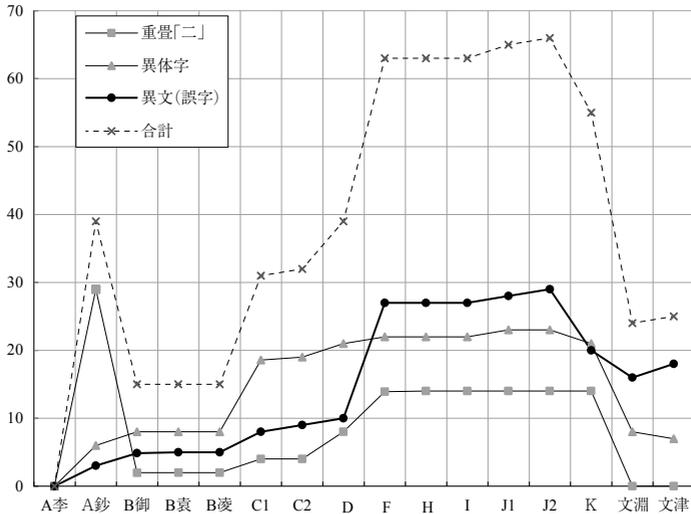
これらの異同状況を資料として諸本の関係について分析を加えてゆく。

⁴⁸『北京図書館古籍善本書目』（p2062）は「四庫底本」に、『中國古籍善本總目（集部上）』（翁連溪編校、線装書局2005年、p1205上）は「四庫抄本」に作る。ともに「四十五卷外集二卷新編外集一卷」「八冊」とするが、北京図書館撮影のマイクロフィルムは第6冊・巻39・20bで終わる。

⁴⁹四庫薈要本の特長については拙稿「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷12行本考」（『島大言語文化』33、2012年）p26。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』43卷12行本考
—12行本の特徴および13行本との関係

柳集 Na	版本		音 辯 本																	他 本						
	卷 数		45卷		43卷																	45卷				
	行 数		12行							13行										6-8		9	10行	9行		
	卷	業 行 (45;43)	A		B					C		D		F		H		J		K	淵	津	韓	眉	魏	鄭
		李	鈔	御	袁	凌	海	1	2	D	F	1	2	I	1	2	J	K	淵	津	韓	眉	魏	鄭	廖	
01		02a08;02a03	由	○	○	○	○	○	○	○	○	田	田	田	田	田	田	○	○	○	○	○	○	○	○	○
02	10	02b03;02a09	王	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	玉	玉	○	玉
03		09a07;07b13	栢	○	○	○	○	○	○	○	○	栢	栢	栢	栢	栢	栢	栢	栢	栢	栢	栢	○	○	○	○
04		01b01;01a13	遷	○	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	迂	○	○	○	○
05	11	01b01;01a13	梁	二	○	○	○	○	○	○	○	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	○	○	○	○
06		01b04;01b03	草	二	○	○	○	○	○	○	○	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	○	○	二	○
07		03a03;02b07	斷	○	○	○	○	○	○	○	○	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	○	○	○	斷	○
08		03a04;02b08	無	○	○	○	○	○	○	○	○	无	无	无	无	无	无	无	无	无	无	○	○	○	○	○
09		03a05;02b09	底	○	○	○	○	○	○	○	○	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底
10		03a05;02b12	昧	二	○	○	○	○	○	○	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	○	○	○	二	○
11		03a10;03a01	辭	○	○	○	○	○	○	○	○	辭	辭	辭	辭	辭	辭	辭	辭	辭	辭	○	○	○	○	○
12		03a11;03a02	與	○	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	○	○	○	○	○
13		03a12;03a03	濟	○	济	济	济	济	济	济	济	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14		03b02;03a05	無	○	○	○	○	○	○	○	○	无	无	无	无	无	无	无	无	无	无	○	○	○	○	○
15		03b03;03a05	汝	二	○	○	○	○	○	○	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	○	○	○	二	○
16		03b03;03a05	耶	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	非	非	非	非	非	非	非	非	○	○	○	○	○
17		03b09;03a11	侵	二	○	○	○	○	○	○	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	○	○	○	二	○
18		03b09;03a11	闕	二	○	○	○	○	○	○	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	○	○	○	二	○
19		03b10;03a12	貌	○	○	○	○	○	○	○	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	○	○	兒	兒	○
20		03b10;03a12	厲	○	○	○	○	○	○	○	○	厉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21		03b12;03a13	處	○	○	○	○	○	○	○	○	処	処	処	処	処	処	処	処	処	処	○	○	○	○	○
22	14	04a04;03b04	略	○	○	○	○	○	○	○	畧	畧	畧	畧	畧	畧	畧	畧	畧	畧	畧	○	○	○	○	○
23		04a04;03b05	無	○	○	○	○	○	○	○	无	无	无	无	无	无	无	无	无	无	无	○	○	○	○	○
24		04a04;03b05	冰	○	○	○	○	○	○	○	氷	氷	氷	氷	氷	氷	氷	氷	氷	氷	氷	○	○	氷	氷	氷
25		04a05;03b06	太	○	○	○	○	○	○	○	大	大	大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
26		04a11;03b11	舉	○	幸	○	○	○	○	○	幸	幸	幸	幸	幸	幸	幸	幸	幸	幸	幸	○	○	○	○	○
27		04a12;03b11	辭	○	辭	○	○	○	○	○	辭	辭	辭	辭	辭	辭	辭	辭	辭	辭	辭	○	○	○	○	○
28		04a12;03b11	一	○	○	○	○	○	○	○	○	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	辭	辭	○	○	○
29		04a12;03b11	晦	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30		04a12;03b12	覺	○	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	竟	○	○	○	○	○
31		06b06;05b10	北	○	○	○	○	○	○	○	○	此	此	此	此	此	此	此	此	此	此	○	○	○	○	○
32		10a07;09a01	里	二	二	二	二	二	二	二	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	二	○
33		10a07;09a01	純	二	二	二	二	二	二	二	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	二	○
34		10a09;09a03	清	○	○	○	○	○	○	○	○	清	清	清	清	清	清	清	清	清	清	○	○	清	清	○
35		10b07;09a13	嚳	二	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
36		12a09;10b10	諄	二	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	二	○
37		14b10;13a05	事	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
38		18b07;16b04	奔	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
39	18	01a04;01a04	庭	○	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	○	○	○	○	○
40		11b04;10a03	烈	○	天	天	天	天	天	天	天	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
41		07a08;06a09	然	○	○	○	○	○	○	○	○	列	列	列	列	列	列	列	列	列	列	○	○	○	○	○
42	20	07b13;06b11	醜	○	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	醜	○	○	○	○	○



1) 45巻12行本の間

A = 李本・鈔本の間に若干相異が見られ、それらは大きく二つに分けられる。一つは鈔本の書写過程での誤字。55「至」は「埵」との字形相似によって見誤ったもの。60・63の「反」は「切」と同義であり、書写人の習慣による不注意。凡そ反切を示す場合、音辯本は「切」字を用いる。他の一つは鈔本における07「断」・11「辞」等の異体字と05・06等の重疊字「二」の多用。異体字は画数の少ない俗字が用いられており、書写が簡便であるために臨時に用いたに過ぎないであろう。重疊字「二」は文義上は誤字といえない。13行本にも見られて一部一致するから李本とは異なる一本があったようにも推測されるが、しかし鈔本には他に李本と異なる所がなく、李本は重疊字を用いないこと、また現段階では45巻12行本の刊本は李本以外に知られていないことから、俗字の多用と同じく書写簡便の要に出るものと考えてよい。今これをI類と呼んでおく。

なお、重疊字の相異について附言しておけば、同じ音辯本であっても、12行・13行・7行（四庫本）という行款の相異があり、同字が重ねて出現しても改行されて行頭に上る時には本字が用いられる。したがって重疊字使用数の比較は同行款本の間のみで有効である。他本はそもそも音辯本と行款が異なり、

また註文も異なるため、音辯本との比較は不可。

2) 43巻12行本の間

B = 43巻12行本である御・袁・凌の三本は対象範囲内で文字に異同は見られない。海本は残巻しか伝わらないが、その限りでは御本等三本と同じであったと推測される。今これをⅡ類とする。

このⅡ類は45巻本 = I類とやや異なる。その特徴は俗字の多用、また誤字の頻出である。これらはいずれもI類よりも後出であることを想像させる。誤字について説明を加えれば、70「巳」の「己」・「巳」との混同は音辯本に限らず当時常習の例であるとしても、40「天」・84「茄」等は字体相近による。61「一一」は、正文「亟遊也」の下に小字夾註「亟：去吏切」とあって正文「一旦……」と続く中、「一」が註文の下で行末にあるために誤って註文に入れてしまった結果、小字二行「亟：去一／吏切一」となったために13行本は更に「亟：去一／吏切」に作り、四庫全書本に至っては「亟：去平／吏切」に作って、共に正文の「一」を失ってしまったのである。39「庭」を「夜」に誤ったのは恐らくその前に「夜」字があることに影響されたものと思われるが、この巻葉では版心上方に大小字数が刻されており、追刻時の誤字であろう。

御・袁・凌の三本は文字のみならず版式・魚尾・大小字数、さらに版面状態に至るまで、特徴において同一性が高く、この限りでは同版のようではあるが、先に指摘したように巻首（凌本のみ明版の補配）および極一部の字様に異同が明らかに認められるから覆刻の関係にある。同版異版の共存を考えれば、同版を用いながら部分的に補刻した可能性が高いが、後人による散佚部分の補配の可能性も否定できない。

3) 43巻13行本の間

C・D・H・G・H・I = 43巻13行本の関係はⅡ類 = 43巻12行本の場合と異なって極めて複雑である。

そもそもいずれも基本的にモノクロのマイクロフィルムを観ての判別であって判然とし難い文字もあるが、明らかな異同が認められてもそれが本来の姿でない場合がある。H2にその例が多い。H1とH2の巻10葉2aは、字様はもとより框・罫の磨滅・寸断等版面状況の一致から見て同版であること疑いないが、H1本は「田」「王」に、H2本は「由」「玉」に作って明らかに異なる。巻29葉2bも同様の一致から同版と判断されるが、H1は「一」（註文小字）・「租」に、H2は「一」（正文）・「租」に作る。文義上いずれもH2の方が適当であり、李本

をはじめ、他の音辯本でもそのように作るものが多い。ただ「玉」のみは音辯本にはなく、百家註本は「玉府」に作って註に「今本皆作玉府」といい、五百家註本・世綵堂本はこれを襲う。そこでそのように作っていたH1の異版と認めねばならないが、そもそもH2は「佚名録何焯批校」⁵⁰の過録本であって、書眉・題下・字傍に何焯（1661-1722）の評語・校語を写しているのみならず、「由」「一」等の字には不自然さが感じられる。「由」は「田」の頭に「丨」を加えたようであり、「一」は左半分を延ばしたように見える。このような加筆の痕跡らしきものはJ本にも見られる。やはり01「由」に作るが、頭の「丨」の太さは不自然であり、明白で簡単に直せる誤りであるために、後人が「田」に加筆して「由」に改めたに違いない。後人が一点・一画の加筆ですむ校勘では文字中に直接加筆する方法を採ったと判断し、表中ではそのように扱った。

まず、43卷13行本のⅢ類・Ⅳ類の特徴は12行本＝Ⅱ類よりも誤字・俗字が多い点にある。しかもそれにはⅡ類の誤字・俗字がほとんど含まれている。39「夜」・42「酌」・61「一」・84「茄」等や04「迂」・07「断」・11「辞」・30「竟」・37「事」・76「韵」等がそれである。いっぽうⅡ類にはない誤字・俗字も見られる。08「无」・12「与」・19「兕」・21「処」・24「氷」・26「牽」・47「蛮」・51「溪」・75「从」等の異体字がそれであり、67「全」を「泉」、71「奇」を「其」にするのは同音による誤り、25「大」(太)・41「列」(烈)・74「置」(直)は字形相近による誤り、45「云」(本)は語義と字形相近による誤り。つまり43卷13行本は43卷12行本を踏襲しており、かつ改版によって行款が大きく変わったために、新たな俗字・誤字が発生した。その結果、12行本よりも誤字・俗字が多くなったのである。しかしⅢ類とⅣ類はともに類内諸本が近いのであって、つまり全同ではなく、微妙に異なる。たとえばF・H・I・Jの誤字数は同値であるが、その内容は異なる。

同類内に目を転ずれば、Ⅲ類の間で若干の文字の相違がみられるが、版面を仔細に観察すれば瑕・亀裂・磨耗等で一致する部分が認められるから、基本的

⁵⁰『北京圖書館古籍善本書目』(p2063) #6251。第1冊表に「何義門手批真跡」、扉に「獲得此書時，自外攜歸。俞荔峰適在斗坐問：何人所批。余曰：義門先生也。荔峰瞠目曰：汝得寶矣，審前後無義門印記，則又曰：於何徵之。余曰：以印文“海岱惟青州”知之。則相與歡笑。回首五十年，忽忽如昨日，而荔峰歿已久，幸兩子皆循謹，能世其學，有孫魁然起矣。荔峰，余姊夫，薦舉孝廉，方正有名於時。光緒甲午（二〇年1894）四月偶抽架上書記此。餅生翁同龢」「此何義門手批本，朱德卿表兄為余自稽瑞樓陳氏（揆）購得。時余十五，喜而賦詩。光緒庚辰七月十日翁同龢記」とあるのに拠ったもの。

には同じ版木を用いていると断定してよい。たとえば巻首冒頭の陸「序」の葉1aで右枠から左第2行第10字「奇」にかけて横の亀裂、また巻1葉1a第2行・第3行中の罫線寸断はいずれもⅢ類の三本に共通する。

しかし先後関係の鑑定は難しい。C1・C2の相異は39「夜」のみであり、C1の方がより12行本に近い。D本はC本とは相違点が多いが、Ⅲ・Ⅳ二類中では明らかにⅢ類に属す。その中で86「代」のみはⅣ類に共通の誤字である。ちなみにこの「代」字は書簡の冒頭に「宗元再拜」で始まる文で、柳宗元の名を「代元」に作るものであって、国諱を避けた代字ではないから、一般的には考えにくい誤りである。なお、韓本には「宗元再拜」四字そのものがなく、「五丈座前」で始まる。また、D本には13「濟」・20「厉」の俗字や32・33・35・36「二」の重畳字のようなⅢ・Ⅳ両類に見られないものがあるから、D本は異なる新たな覆刻本であるか、あるいはD本を基にして多く補配した一本である。現時点での調査の限りでいえば、13行本でD本のように作る異本の存在は知られていないから、後人がⅣ類以後の覆刻本によって欠葉を補綴して旧を装ったとは考え難い。しかし、これとは逆に、「代」を除けばCがDと異なる文字はすべてⅣ類に見えるから、Ⅳ類はCを底本として覆刻した、つまりDがCより先にあったとも考えられる。Ⅲ類内の先後関係はこの限りでは明確にできないが、この諸本は基本的に同版であると断定してよく、異同は欠葉の補刻に因るものように推察される。

Ⅳ類に至って誤字が激増する。03「栢」・16「非」・28「一」・29「悔」・31「此」・43「離」・44「乏」・55「陘」・62「粗」・68「下」・69「鏡」・78「轉」・79「李」・80「薄」・85「挿」はⅣ類のみの誤りである。多くが字形相似による訛誤であって杜撰な一本であることが知られるが、ただ01「桓」を「栢」に作るのには理由があり、宋本が「桓」の末筆「一」を闕いていたために右部分を「百」の誤筆と解し、その結果、全く別の「栢」に変わってしまったのである。

Ⅳ類でもⅢ類の俗字・誤字を含み、さらにそれらが増加している。ここにも先のⅡ類からⅢ類への変化と同様の踏襲的增加の関係があり、それは成立の先後関係を示す。段階的変化を観るといふ所以である。Ⅲ類には「姓氏畢」があったが、Ⅳ類ではその代わりに木記「正統戊辰善敬堂刊」が加えられていた。おそらくこれは書坊＝版權者が善敬堂に移ったことを意味する。善敬堂は明代建陽の比較的有名な書坊であるがその技能は高くはなかったことがこの比較によって知られよう。

Ⅳ類内について観れば、共に一部の版面の瑕・亀裂・磨滅等の状態から見て基本的に同版であると認めてよい。たとえば巻1葉1aの第1行から第6行の罫線の状態（01「先」左、02「童」右、04「雲」左下、05「唐」右上、06「獻」左、「夷」右、「雅」右下等々）、巻10葉02aの亀裂（第1行第10字「烏」の右下から第4行「乃」にかけて）と下の框線の寸断（第4行～第5行、第12行～第13行）、巻29葉2bの大きな亀裂（左框中央から右に「氣衆其更也者故自」九行）。先に指摘したように、H2にはF・Iとの異同が見られ、異版のように思われるが、それは後人の加筆のためである。これらの一致によって木記「正統戊辰善敬堂刊」を有するF本が初刻本であってH本・I本が木記を削った後印本であることが証明される。木記の抹消はそこに書坊名があったからであり、それは書坊＝版權者が入れ替ったことに起因する。そこで新しい書坊のH2本では木記内の文字を墨釘にしたが、次の世代のI本では残存していた木記の枠まで消してしまい、さらにJ本ではその部分に罫線を加えて隠滅が謀られた。このような例は多い。F本で木記「正統戊辰善敬堂刊」は巻首葉4「諸賢姓氏」の裏4bにあるのだが、台湾中央図書館蔵#09749では4bの末二行が、同#09750は半葉(4b)が、同#09751では「諸賢姓氏」の一葉(4)が切り取られている。これらはいずれも「正統戊辰善敬堂刊」を故意に隠蔽したものである。

I本はH本と一致するが、J本とは若干異同がある。J本には巻29葉2bの大きな亀裂が見られない。また、J本ではI本の誤字・俗字を全て含んでおり、しかも38「棄」・87「後」など異体字・誤字がより多くなっている。これも他の13行本には見られないから散逸した部分を補刻したのではなかろうか。いっぽうJ本は同じ「上海商務印書館縮印元刊本」の影印のはずであるが、J1とJ2でやや異なる。四部叢刊本の間には異同があることはすでに周知の事実であるが、音辯本においてそれを証明されたのは新海一博士である。博士は音辯本四種を比較されているが、今、四部叢刊本二種に限って摘出すれば「己／巳」・「凡／丸」・「子／孑」・「招／拓」・「拈／喜」・「友／友」・「太／大」・「上／土」の八例が挙げられている⁵¹。その中で「己／巳」・「子／孑」・「招／拓」・「友／友」・「太／大」・「上／土」などは、単なる墨の磨滅・剥落・残滓による相違、あるいは誤認によると疑われる節もあるが、たしかに明らかに異なるものもある。たとえば01「由」は共に「田」に加筆したものであり、版面状態も酷似

⁵¹ 新海一『柳文研究序説』（汲古書院1987年）『増廣註釋音辯唐柳先生集』校讎 p204-206。

するが、62「租」のある巻29葉2bでは版面状態が一致するにも拘らず、J1は62「租」、J2は「租」に作る。「租」は01「由」の例と同じくJ2のみの加筆に相違ない。挙げられていないが、01「由」と同葉の2a01の「烏」でJ1が「ハ」であるのに「丶」を加えて「𠂔」に作っているのも同様である。しかしたしかに全葉が同じではない。たとえば87「扌」の巻37葉08では版面は酷似するが、J1は「誠喜誠扌」に、J2のみ「誠喜誠喜」に作る。J1の「扌」は他本と同じで、J2の「喜」は前に「喜」とあるのに影響された誤字と推察されるが、これは先の「由／田」・「租／租」等の例とは全く異なり、単純な加筆ではすまない。そこでJ2はJ1の後にさらに局部補刻が加えられたものと考えられるのだが、しかし仔細に観れば、前の「喜」字とは字様が明らかに異なり、また字上に磨滅もない。このような例は他にもある。巻10葉03bの「凡／丸」の相違がそうである。J2の「凡」字は明らかに「丸」に近く、それは墨の残滓に由るものでも、後人の加筆に因るものでもない。しかもその葉の版面状態はJ1と酷似している。そこでこの部分に何等かの目立った不具合、たとえば蠹害や破損があったために書き入れたことも考えられよう。現時点では、このような異字発生の原因を筆者は解明することができないが、J2がJ1後の補修であること、J本がF本後にあってIV類に属することは認めてよい。

明代「正統戊辰（十三年1448）善敬堂刊」の系列であるIV類に続く13行本にK（正徳十年1515劉玉刻）がある。字様がIV類とは明らかに異なるから新版であることは確かであるが、IV類の誤字・俗字を踏襲しながら、しかし若干減少している。04「遷」（迁）・38「棄」（弃）・76「韻」（韵）の異体字がそうであり、また01「由」（田）・55「埕」（踉）・62「租」（租）・69「境」（境）・79「本」（李）・85「秭」（挿）・86「宗」（代）・88「復」（後）が異なっているが、これらが誤字であることはいずれも文脈・語義上比較的容易に判断できる。劉玉「跋」にいう「（劉）玉竊校讎」とはこれらを指す。つまり劉玉校定本の底本は、I・II類はおろか、III類の段階とはなおかなりの距離があるからIV類であること、疑いない。III段階とIV段階との中間に位置するのは、IV段階にある一本を底本にして若干の文字を訂正しているためにIII段階に近づいているのである。「跋」には「克遂完美……閱之無魚豕之訛」と自画自賛するが、完美とは言えないまでも、魯魚亥豕の類は更正されている。確かに善敬堂刊本は杜撰の誹りを免れない明代建陽本の粗笨を代表するような代物であった。その中で誤字・俗字の最も多いのがJ本であるが、J本こそは他でもない今日の通行本、涵芬

楼蔵本による四部叢刊本である。それは「正統戊辰」十三年（1448）より後の改悪本であり、張元濟『涵芬樓燼餘書録』⁵²（民国二六年1937）以来の「元天曆（1328）刊本」説はまったく当たらない。

4) 四庫全書本との関係

周知の如く四庫全書本の共通特徴として文・字の意図的な改定がある。それには凡そ政治的・文字学的の両側面がある。夷狄等北方異民族蔑視に関わる部分の削除や改字、文意不通の明白な誤字および俗字・異体字の校正がそれである。音辯本も例外ではない。四庫本は館臣による鈔本であって全面的に検閲と校勘を経ているのではあるが、音辯本についていえば校勘は十分ではないばかりか、過剰な校勘意識が改悪さえ招いている。

まず指摘すべきは13行本に始まる多くの誤字がここでも踏襲されていること、さらに13行本の中ではⅣ類に見られる誤字、03「栢」・29「悔」・43「離」・44「之」・78「轉」・80「薄」等的一致や相近である。Ⅳ類以来の誤字を踏襲していることによって四庫本の底本もⅣ類に属すと認めてよい。なお、文津閣本では86「宗元再拜」四字を欠くが、それはこの巻が韓本を用いているためである。これに限らず、津本は韓本で補欠している部分が多い⁵³。

すでに誤字の踏襲関係によって諸本の先後はほぼ明らかであるが、中でも26「一」から「辭」への変化はそれを示す好例である。

類	巻	行	諸 本	正 文 異 同
I	45	12	A (李・鈔)	舉手而辭一晦一明覺
II			B (御・袁・凌・海)	舉手而辭一晦一明尙
III		13	C・D	牽手而辭一晦一明尙
IV			F・H・I・J・K	牽手而辭二悔一明尙
V			6~8	四庫 (淵・津)

本来は「溪神……舉手而辭。一晦一明，覺而莫知所之」という意味なのであるが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の「辭一」がⅤ類「辭辭」に変わったのはⅣ類「辭二」の過程があったからである。Ⅳ類がⅢ類の「一」を重疊字「二」に誤ったため

⁵² 張人鳳編『張元濟古籍書目序跋彙編（中）』（商務印書館2003年）所収、「増廣註釋音辯唐柳先生集」の条、p661。『涵芬樓燼餘書録』は1951年の出版であるが、その瞿啓甲「序」は「丁丑」（民国二六年）の作。

⁵³ 詳しくは拙稿「清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」（『島大言語文化』35、2013年）p25。

にV類は本字「辭」を改め、さらに「𦰩」・「竟」を「擧」・「覺」に改めたように正字「辭」に改めた。つまりV類はIV類の過程を経て成立しているわけであり、ここに四庫本が明版の43巻13行本である「正統戊辰善敬堂刊」本に拠っていることが証明される。「提要」にはその底本を「内府藏本」というが、実は粗悪な明刊本であった。善敬堂刊本の系統は種類が多く、さらに精査・対校を重ねてゆけば、より近い一本が明らかになるかも知れない。

次に、四庫全書本の間をみれば、周知の如く文津本よりも文淵本の方が校勘のレベルが高いが、そのことはこの例によっても明白である。文津本のみに見られる03「柏」・61「平」・84「蜂」は、すでに所拠のIV類13行本の誤字が文意不通であったために更に意を以て改めた結果、誤りを重ねたものに違いない。たとえば「柏」は本来「栢」字なのだが、宋代に末一画が闕筆されて「栢」となり、元代にはそれが継承されていたが、明代には正統十三年（1448）書坊「善敬堂」によって「栢」と誤写され、さらに清代には館臣によって「栢」の正字「柏」に校正された。いずれもわずか一画の差であるが、誤解に誤解を重ねていった結果、「栢」が字義の全く異なる字「柏」に化けてしまった。伝言ゲームに似て滑稽でさえある。

5) 他本の間と音辯本との関係

他本の間では、若干の異同、つまり韓本の「栢」が缺筆字による清抄本のための誤字であり、鄭本の「府」が「俯」の字形近による誤字であるのを除いて、大きな異同はない。なお、これは音辯本間に異同のある若干例に限って対校したものであり、I類と他本とが全て同じというわけではない。注目すべきは音辯本の諸版の中でI類=李本が他本に最も近いことである。この対応関係も音辯本間における踏襲の存在と先後関係の証左となる。つまり最も他諸本と共通しているI類が最も基底にあり、そこからII等が派生していったことが他本との関係においても理解される。

以上の対校は全文に互るものではなく、その1割にも満たない量であるが、統計学的観点から特徴と相互関係を検証することは十分可能である。

おわりに

北宋における韓愈・柳宗元の評価と共に版本が刊行され、南宋では各地で州学・軍学を中心にして註釈が行われるようになる。中後期には家塾・書坊によって『柳集』の輯註本が盛んに刊行されるようになるが、その中でも後の元

明を通して最も版を重ねた大ベストセラーとなったのが『増廣註釋音辯唐柳先生集』、音辯本である。あるいは覆刻重刊され、あるいは45巻、43巻、20巻、12行、13行、10行、9行等々に改編通修されて10種類を越える。その中で最も信頼性が高いのは45巻12行本であり、これまでほとんど存在さえ知られていなかった淳祐九年劉怡堂輯註・平山劉欽序の北京大学図書館蔵李木斎旧蔵本である。いっぽう元明間においては輾轉通修の過程で誤字はいよいよ多くなっていく。それは凡そ次のような段階に分けられる。

I：南宋後期の建陽刊淳祐九年（1249）序45巻12行本

II：元代前期（？）の建陽刊43巻12行本

III：元代後期（？）の建陽刊43巻13行本

IV：明代前期の正統十三年（1448）建陽王氏善敬堂刊43巻13行本

V：乾隆四十九年（1784）四庫全書本

諸本間に見られる誤字・俗字の増加は踏襲に由るものを含んで段階的に変化しており、その原因の一つに巻・行の改変がある。I期からII期への12行本間の変化で若干誤字が増えたのは45巻本から43巻本への改変に由る。それは45巻本から正集末の「非国語」2巻を単に正集から外して『別集』2巻としたというような単純な改編ではなく、全体に及ぶような変化、つまり45巻12行本に拠りながら新たに翻刻したことによって発生した。43巻12行本で現存する4部は、基本的には同版を用いながら、字様・版面状態・宋諱缺筆等を異にする巻葉があるから部分的に補刻を重ねて行ったものであるが、宋諱缺筆と多くの同版巻葉の版面状態から観て御本>凌本>袁本=海本の順での通修本ではなかろうか。II期からIII期の間では、12行21字から13行23行に改版したためにやや誤字が増え、IV期はIII期と同じ43巻13行ではあるが、おそらく書坊が善敬堂に替わって新刻されたために誤字がかなり増えた。IV期=13行本には木記「正統戊辰（十三年1448）善敬堂刊」があり、これと同じ木記をもつものに9行本（G）があるが、13行本と比べて字様は稚拙であって誤字もさらに多い。建陽では弘治十二年（1499）に大火災が発生し、版木は尽く灰燼に帰したという⁵⁴。9行

⁵⁴ 方彦寿『建陽刻書史』（中国社会科学出版社2003年、p243）は『〔民国〕福建通志』に「古今書版、皆成灰燼」とあるとして「這場火災只是造成了建陽書坊的部分損失，此後不過數年，到正德、嘉靖期間，建陽書坊的刻書業較明前期更加繁榮」という。『〔民国〕福建通志』（『中国地方志集成・省志輯・福建⑩』鳳凰出版社等2011年）總卷1「通紀」卷8「明」（11a）に「〔弘治〕十二年十二月：建陽縣書坊火，古今書板皆灰燼」（p73下）。早くは『明史』卷188

本「正統戊辰善敬堂刊」木記本は版木を焼失した王氏善敬堂が再建後、版を新たに刊刻したものであろう。また、正徳十年（1515）劉玉刻本（K）は校定を加えているが、その底本も粗悪な「正統戊辰善敬堂刊」9行本であったかも知れない。V類はIV類を底本としながら校勘を経ているために誤字が若干訂正されているが、新たな誤字も加わっている。

今日の通行本となっているのは四部叢刊本と四庫全書本であるが、その依拠は避けなければならない。前者は善敬堂刊13行本の通修本であり、しかも補刻部分に誤字が多く、後者も善敬堂刊13行本を底本とする。前者は民国期書誌学大家の鑑定を経た収蔵の厳選により、後者は清朝内府藏本の依拠と清朝文壇の権威による校勘とによって、いずれもテキストとして信頼性の高い定評を得ているが、少なくとも柳宗元集版本としてはそれは当たらない。いずれも明代中期、少なくとも正統年間以後に成る、誤字の多い粗悪な通修本である。さらに四庫全書本の中でも文津閣本が最も杜撰であり、誤字の多さもさることながら、乱丁・欠落も多く、さらに韓醇の詁訓本の混入が随所に見られる。

次号ではⅡ・Ⅲの成立時期について究明する。

(2014.9.27)

* 本稿は平成26年（2014）科学研究費補助金（課題番号26370409）による研究成果の一部である。

「許天錫傳」に「(弘治)十二年，建安書林火。天錫（1461－1508）言：“去歲闕里孔廟災，今茲建安又火，古今書版蕩為灰燼。闕里，道所從出；書林，文章所萃聚也。……”」(p4988)。